「学校安全総合支援事業」（いわての復興教育スクール〈内陸〉）成果報告書

学校名：軽米町立軽米小学校

Ⅰ　事業の概要（地域の実情含む）

1　過去の災害について学習するとともに、災害の教訓を語り継ぐ地域の活動「夢灯り」の取組に参加し、町の災害や安全対策についての関心や、町の未来を支える一員としての意識を高める。

2　地域の状況をとらえることにより、自然災害について理解を深め、「そなえる」について考え、防災意識を高めるとともに、災害から身を守る知識や技能を習得する。

Ⅱ　取組の概要

1　避難訓練①（防災・引き渡し訓練）【５月 10 日】

学校からメール配信を行い、保護者に来校していただき児童を引き渡す訓練を実施。保護者に児童を引き渡す方法の確認と、緊急メール配信の有効性を確認した。

2　防犯避難訓練①（不審者対応）【７月 16 日】

不審者侵入を想定した避難訓練を実施。不審者侵入に対応した校内放送の指示のもと、児童及び職員が体育館に避難した。

参加児童 203 人　参加教員 17 人

3　避難訓練②（火災）【８月 26 日】

校舎内で発生した火災に対し、放送の指示で校庭に避難した。放送開始から、校庭集合までの間に守るべき約束事に注意しながら、正しい経路で避難した。

4　復興教育防災水害講演会（６年）【９月６日】

町防災センターにて、軽米食堂店主、堀米さんから平成１１年の豪雨災害の状況について話を聞く。災害前の町の様子や災害当日の町の人々の動きを撮影した映像をもとに、当時苦労したことについて話していただいた。

5　起震車体験（１・２・３年）【９月 12 日】

軽米高校が借用した起震車を本校でも借用し、１～３年生が体験活動を行った。

参加児童 103 人　参加教員６人

6　夢灯り【９月 28 日】

町が主催する「夢灯り」に、６年生児童が制作した夢灯りを展示した。当日の催しに参加した児童もあった。

参加児童７人　参加教員３人

7　学習発表会【10 月 19 日】

６年生が、今年度総合的な学習の時間に学習した 20 年前に起こった軽米豪雨災害を題材とした劇を発表した。

出演児童 32 人　参加教員 17 人

8　豪雨災害講話（４・５年）【11 月６日】

軽米食堂店主､堀米さんに来校していただき、災害前の町の様子や当時の被害の状況を撮影した映像をもとに講話していただいた。

参加児童 67 人　参加教員４人

Ⅲ　取組の成果と課題

1　成果

（1）５月の避難訓練（防災・引き渡し訓練）により、地震発生時に身を守る方法を確認することができた。メール配信から保護者への児童引き渡しの流れについても保護者とともに確認することができた。

（2）防犯避難訓練により、不審者侵入があった際の緊急放送の内容について確認することができた。不審者に対応する職員の連携のありかただけでなく、児童の移動経路についても見直すことができた。また、避難訓練（火災）により、避難経路とともに、避難の際の注意点や人命を守るための大切な行動について確認することができた。

（3）復興教育防災水害講演会と豪雨災害講演会により、２０年前に軽米で発生した豪雨災害を身近な出来事として実感することができた。見慣れた町が洪水被害を受けている映像を見ることで、現実に起こりうることだと理解することができたようである。また、災害が起きた際に、自分がどのような行動をとるか自分なりに考えを持つことができた。

（4）起震車体験により、揺れている中で自分の身を守ることの難しさについて感じながら、実際に地震が起きたときに迷いなく素早く自分の身を守る意識と技能を高めることができた。実際に揺れているなかで技能を確認できる貴重な体験となった。

（5）町が主催する「夢灯り」の事業への参加により、防災の学習を振り返りながら、地域の復興に関わる活動に関心を持ち、町の未来を支える一員としての意識を高めることができた。

（6）学習発表会の取組により、今まで学習してきた防災学習のまとめとしての劇を発表することができた。学習して学んだことや感じたことを劇に織り交ぜながら表現できた。

2　課題

（1）　校内での防災意識や避難の方法は身に付けることができたと思われるが、家庭での防災に対する取り組みや地域での防災活動への参加等を通してさらに防災意識を高めていくことができると考える。

（2）　今年度は復興教育に関わるモデル地域ということで、地域の催しにも参加させていただいたが、これを今後継続するためには、新教育課程にきちんと位置付けていく必要がある。

（3）　避難訓練等の防災・安全にかかわる年間計画や危機管理マニュアルを、今年度の実践をもとに見直していく必要がある。

（4）　小中連携による防災訓練や避難訓練を計画することにより、児童の防災意識が高まっていくものと考える。今後、小中連携の可能性を探っていく必要がある。